

〔理事長挨拶〕

## 第33期理事長のご挨拶

理事長 廣 田 勇\*

このたび改選されました第33期日本気象学会新理事会の決定により、前期に引き続き理事長の任をつとめることとなりました。責任の重さを痛感いたしますが、学会理事長とは単なる事業経営者ではなくあくまでも気象学振興の先導者であるべきだ、との信念に立ってこれまでの経験を生かし全力を傾注する覚悟です。

幸いにして、前期から継続して理事をつとめて下さる方々が多いので、各種委員会の活動は停滞することなく順調に継続発展できるものと信じております。いっぽう学会事務運営の中心となる庶務と会計の仕事は新理事である気象庁の多田英夫氏と板東恭子氏が分担して下さることになりましたので、従来どおり事務局との連携にも万全を期することができます。理事長代理は、これも前期に引き続き、気象界の様々な分野に精通しておられる古川武彦理事にお引き受けいただき理事長の相談役としてご尽力をお願いする次第です。

さて、今期の学会運営は、前期に提起された幾つかの新しい問題・課題を具体的な形で実行に移してゆることが求められています。

そのひとつは今年の春の総会で議決された定款改定に基づく会員制度の問題です。詳細は後日「天気」に掲載しますが、法規上社団法人の社員として定義される通常会員となられる方には学会運営上の権利と同時に義務責任が伴うことをご理解いただきたいと思います。

ふたつめは、前期の評議員会でもご指摘いただいた「外部に対し開かれた学会」の具体例として、地球環境問題に関する一般社会むけの啓蒙啓発、気象予報士会との接点拡充、理科教育（特に地学）への関与、など学会としての活動の幅を広げてゆくことです。

気象学研究に直結した課題としては、アジア地域、特に日中韓三国の学術交流の促進、研究成果発表の場を広げるための国際学術誌 SOLA（電子ジャーナル）の創刊があります。前者は、来年春の大会と連動させて第一回の国際シンポジウムを東京で開催すべく国際学術交流委員会・講演企画委員会が準備を始めたところです。新機関誌 SOLA については理事会内に編集委員会が発足し、来年早々の創刊に向けて準備が進められております。言うまでもないことですが、これらの新しい活動の成功は、気象学会会員各位の優れた研究成果があつてこそそのものです。その意味で、これらの新企画が気象学の研究発展を促進させるものとなることを強く念願する次第です。

第33期におけるもうひとつの大きな課題は今から3年後（2007年）の日本気象学会125周年記念行事の準備を始めることです。しかしその際に留意すべきは、この記念行事が単なる形式的な儀式やお祭りであつてはならない、ということです。

気象学会百周年記念行事が行われた1982年と現在を比べてみると、研究テーマの内容はもちろんのこと、学会員の年齢構成や所属・職域、或いは研究環境などの点で大きな違いのあることに気がつきます。つまり、過去の四半世紀で気象学研究に関し何がどう変わってきたのかを改めて冷静に考察判断する必要があると思われまふ。その意味で、来る125周年をひとつの節目として捉え、過去の研究の歴史的評価を正しく行ない、それを受けて今後の展望を考えることは意義深いものがあると考えられます。このような見地から、学会を構成している指導層・中堅・新進の方々が夫々の立場に応じた形でこの記念行事に積極的に関与して下さることを期待するものです。

\* 京都大学名誉教授。